（４）内山　享（旧姓　伴）氏の思い出

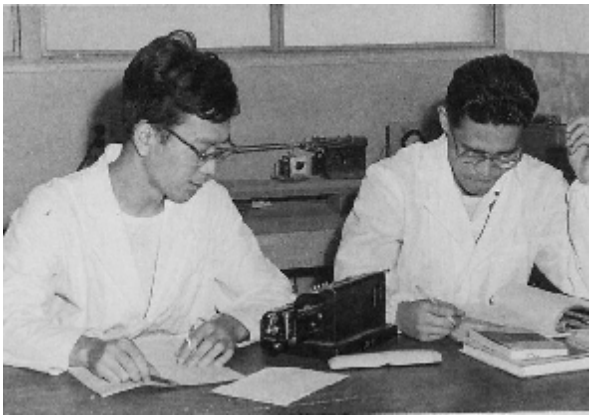
①久保田　康平

内山享氏は、（私と同じ）電気工学第三講座に在籍し、藤村先生（当時助教授だったか講師だったか忘れましたが・・・）の唯一の弟子として、「放電加工の研究」をやっておられ、「結構、数多くの実験をやらなければならないんだ」と言いながらコツコツと放電加工の実験をされていた姿が懐かしく思い出されます。

②出水　博造氏より情報提供された内容をまとめたものです。（文責：幹事）

2004年10月頃、同期会の後、写真送付などでメールをやりとりしたそうです。その時、「血液の病気にかかっているが、丁度退院して自宅療養になったところで、今後はインターネットで囲碁の対局をしたい。」と記されていたそうです。

出水氏は、同じ病気の友人から話を聞いて彼に伝えて上げたそうです。



＜増井氏と内山氏＞

（５）増井　澄遠氏を偲ぶ

①稲田　昌義

増井君と私は、中百舌鳥駅から、府大と反対方向に歩いた方向の下宿を利用していた。増井君は中百舌鳥駅からは近く私の下宿は更に北の「長曽根町」にあった。

増井君とは、同じ第三講座に所属し、下宿も近いため、近しい関係にはあった。

初めにぐっと近くなったのは、学生の間に自動車免許を取得したくて、運転の練習をする事になった時である。増井君は、自動車部に入っていて、先輩格に、川阪さんと宮浦さんがいた。増井君は、小さなトラックを借りて来て呉れて、校内で動かすことの練習が始まった。どこかのグランドに、金属棒で筋を引き、そこで「クランク」や「Ｓ字カーブ」の練習も始まった。坂道発進の練習は、化学工学科教室の車寄せの坂道だった。増井先生は厳しかった。へまをすると罵声が飛ぶ。けれども親切であった。自動車部と増井君のお蔭で、ガソリン代だけの負担で、自動車運転の基本を学ぶことが出来た。学科試験は、電気工学科のクラスメート数人と一緒に受験した。次は、実技試験だ。試験コースでの経験はない為、自動車教習所で、30分間の練習を受けた。教官は横に乗るが、増井君とクラスメートが後部席に座っての実地練習を２回行った。最初の実技試験では、一つ手前の「クランクコース」に入ってしまい、失格。２回目の試験は夜間の時間帯というので、その時間帯で営業している塚本駅近くの教習所を探してもらって、増井君が後部席に乗って練習を終えた。２回目の実技試験は合格。運転免許証を取得する事が出来た。増井先生は恩人である。

次は、夜の行動である。私は決して酒に強くはないが、「飲む」雰囲気は好きであった。増井君は酒は強かったと思う。深酒はしないが、二人で何度も、堺東へ出かけた。アルバイト料が入ったからとか、奨学資金が入ったからとか、少々のお金が出来ると、出かけることになる。帰るのは１２時をとっくに過ぎ、同じ方向だから、タクシーを利用する。時にはスナックのオーナーに同乗させてもらうこともあった。

卒業後は、顔を合わせることは殆んどなかった。宮浦さんから、増井君が難病に罹り入院したとの連絡があり、二人で阪大病院へ見舞いに行った。舞鶴からの土産に蒲鉾を持参し、届けてもらった。身体の免疫力が弱っているとのことで、マスクをかけて短時間の面会を病院から許された。本人は元気そうに話して呉れた。「蒲鉾は旨かった。」と言ってくれたのが最後に聴いた言葉となってしまった。ご冥福を祈ります。

②谷口　宏一

学生時代の記憶であるが、ニックネームなのか、「ゾーイ」君と呼ばれていたような気がする。かなり強い度のめがねをかけて、頭の毛が多くトサカのようで、独特の話しぶりだったように思う。中モズ駅の踏切を渡ってすぐの下宿に訪ねて行ったことがある。メカ好きで、自動車同好会に所属されていた。ある日「夕べ徹夜した」と言うので何故か聞いてみた。卒論のためにあの「ｶﾞﾁｬ・ｶﾞﾁｬ・ﾁｰﾝ」と言う手回しの計算機を借り出して、雨に濡らしてしまった。そこで、全部品をバラして、乾かして再組み立てしたと言うのである。その責任感の強さと技術力には感心した次第である。きっと良い技術者になられたと思うのに、卒業後すぐに病で亡くなられたと聞いている。本当に残念である。

③吉田　哲郎

増井君は私が府大電気工学科に合格し来阪して出会った最初の学友であった。彼は三重県から、私は山口県から、青雲の志を抱いて中百舌鳥の学生アパート「紫雲荘」に入り、そこで初めて知り合い四年間を一緒に過ごした。

秀でた額を髪で隠した色白の好青年であった。彼は自動車部の部活に入り運転免許を取ってからはモータープールでのアルバイトで忙しく、私は家庭教師のアルバイトで忙しく、大学からアパートに帰っても中々一緒に居る時間は少なかったが、試験前には講義ノートを見せ合ったりした。藁半紙にきれいに書き写していくのが、彼の流儀であった。

三回生の夏休みに日当が貰えるからとのことで、二人で南海電鉄の企業実習に参加して、早々と学外実習の単位を取得したりもした。

麻雀も彼に教わった。やはり藁半紙に上がり役を書いて丁寧に教えてくれた。煙草をよく吸い右手の人差し指と中指の先は真っ黄色に染まっていた。部屋で酒を飲んで歌を歌ったりもした。「暁に祈る」が好きで、私は一番の「ああ　あの顔であの声で…」しか知らないのに、彼は二番の「ああ　堂々の輸送船…」以下も知っていて全部歌うので、頭の良い奴だと思った。堺東の夜の街にも一緒に飲みに行った。カウンターに座って、トリスのシングルやハイボールを飲みながら粘ったものである。思えば楽しい青春時代であった。

卒業して別れ別れになってしばらくしてから、同期会幹事から知らせを受け、彼が最新の現在医学をもってしても直すのが難しい病気にかかって危篤状態らしいとのことを知った。すぐに手紙を書いて送り、少し遅れて献血手帳を作って届けた。まもなく奥様から便りをもらった。彼は私の手紙を読んで、涙を流し喜んだとのこと。しかし後で送った献血手帳は間に合わず、あの世に旅立ったとのこと。私の送った献血手帳は奥様の手紙に同封されて戻ってきた。涙で書かれた奥様の手紙を涙で読んで、私はあまりにも早い彼との別れを悲しんだ。

ああ　思えば本当に純粋なよい奴であった。今もこれを書きながら涙が出てくるのを抑えることができない。いずれあの世で再会し、酒酌み交わし、一緒に「暁に祈る」を手拍子打ちながら歌うことになるだろう。それまで彼の冥福を祈っている。　合掌